

Title	故マルク・ブロック教授の歴史理論について：遺著 歴史学のための弁明 の紹介 その一
Sub Title	The late professor Marc Bloch's theory of history : introduction to his posthumous work; "Apologie pour l'histoire" 1949. part I.
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.4 (1953. 4) ,p.298(78)- 309(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19530401-0078
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530401-0078">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530401-0078</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

方の間のギャップに橋渡しをした諸要因は次のように指摘されている。一、ケツ(Koets)報告、ケツ博士(Dr.P.J. Koets)を長とする半官のオランダ使節團がジャバ内部を旅行して報告書を提出したが、その内容は共和国に對して非常に友好的であつた。二、オランダの經濟的行詰りの壓迫、三、十一月三十日のイギリス軍の繼續的撤退、四、批判的な世界の輿論、五、委員會とインドネシア側代表との會議の議長を務めたイギリスのキレン卿(Lord Killearn)の電撃的影響、<sup>(11)</sup>が挙げられている。ともあれ、共和国、オランダ間の長い交渉、シャリルとモークの努力は一應このリンガジャティ協定に實を結んだわけである。次にこの協定の内容そのものの検討に移る。

- (1) Wolf; Indonesian Story, p. 32.
- (2) Gerbrandy; Indonesia, p. 62.
- (3) Cf. ibid. pp. 62, 68.
- (4) Collard; Question d'Indonesie, p. 9.
- (5) Wolf; op. cit., p. 35.
- (6) Mook; The Stakes of Democracy in Southeast Asia, p. 212.
- (7) Ibid., p. 214.
- (8) Ibid., p. 118. and Wolf, op. cit., p. 37.
- (9) Wolf; op. cit., pp. 36, 37.
- (10) Ibid., p. 38.
- (11) Ibid., p. 40.

退屈させられる程である。語彙のうちからこの言葉を完全に削除するや、要請される迄になつてゐるし、又デュルケーム派の社會學者達が歴史といふこの言葉のために場所を空けてゐるとしても、然しその場合もこの言葉を人間に關する様々な學問の最も端に置いたに過ぎないのであつて、人間に關する様々な學問といふ一つの枠のなかにおいて、彼等にとつて合理的分析が可能と思はれること全部を社會學のなかに取纏め、最も表面的であると同時に最も偶然的であると判断した人間についての諸事實を隅に投込んだのであつた。

然し歴史といふこの言葉に對しては逆にその持つ最大の意味が守り持たなければならない。固より歴史といふこの言葉は個人か社會若しくは一時的な危機の描寫か最も永續的な要素の追求かに力點を置くことになつてゐる研究の如何なる方向も前以て制限はしないし、又それ自體のうちに如何なる規定も含んではないのであつて、最初の語原に従へば、「研究する」といふこと以外の何事にも當嵌まらなかつた。歴史といふこの言葉は今から二千年以上も前に人々の口に現はれ、爾來多くの違つた内容を持つて來たが、この點は如何なる國語においても眞に生きた言葉全部の運命であるといふほかなく、若し學問がその發見物の一つ一つに對して新しい呼び名を探さなければならぬといふとしたら、學問の領域において如何に多くの名前が作られ、又如何に莫大な時間の浪費となることであらう。

ギリシヤ人の輝かしいこの呼び方に大人しく忠實に止まりは

故マルク・ブロック教授の歴史理論について

- (12) Gerbrandy; op. cit., p. 94.
- (13) Ibid., p. 90. 以下同様にしては後に觸れる。
- (14) Wolf; op. cit., p. 43.

### 故マルク・ブロック教授の 歴史理論について

遺著「歴史學のための辯明」の  
紹介 その一

渡邊 國廣

著者が經濟史家として我が國に紹介されてから既に久しい。本書は同じ著者に依る方法論的反省であり、未完の小著において著者は歴史研究の正しい態度を説かうとするのである。<sup>\*</sup>尚本書の梗概並びにその成立事情に關しては既に柴田三千雄氏が「歴史學研究」第一五一號において解説されてゐるから參照を載くこととし、ここにおいては餘りに簡潔な佛語を以て綴られてゐるため一般に理解の非常に困難な本書の全體を逐次忠實に紹介して見たい。<sup>\*</sup>

歴史家の選擇。

歴史といふ言葉は非常に古い言葉であり、屢々これに依つて

するが、ケルヴィン卿やランジュヴァンの物理學がアリストテレスの物理學でない如く、今日歴史といふ場合ミレトスのヘカタイオスが書いた歴史ではない。然らば歴史とは何か。

然し問題は長くて嚴格な歴史の定義を確立することを以て解決されるのではない。現に熱心な研究者の誰もが信仰の簡條ともいはるべきそのやうに嚴密な歴史の定義を確定するために絶えず苦しんで來たことはなかつた。寧ろ定義の過度の緻密さは知識に對するあらゆる熱望のうちの最上のものを些かも受入れないのであつて、研究の對象として未だ完全に決定したわけではない學問に對する熱望の微かな動きも研究の範圍を擴大しようといふ意圖も毫無しにしてしまふ。又定義の有害な危険は明確に限定することの出来る程慎重に取扱はれてゐないことである。例へば邊境の神々の番人が「この學科若しくはそれを扱ふ態度は疑ひもなく魅力があるものかも知れない。然し……それが歴史ではない」といつてゐるけれども、往時の職人組合長が、熟練職人に對して認められた仕事を明文化し、又仕事の一覽表が一旦決定を見たならば、特許状を持つた職人に對してだけそれに従事することを許す如く、確定されたわけではない。とにかく歴史家は無限なしかも混沌とせる現實に直面して自己の道具を適用すべき特別な事項を必然的に區別するやうになつた。そのために歴史家はすべての證據において例へば生物學者の選擇と同一ではなく、歴史家本來の選擇を行なふのであり、正しい選擇に従ふことが歴史を研究する際の眞の態度でも

あつたのである。然らば歴史家は研究の對象として何を選択しなればならぬのであらうか。

### 歴史と人間達

「歴史は過去のことについての學問である」と屢々いはれた。然しこれは誤つた言分である。

第一、過去のことであれば、それが學問の對象たり得るといふやうな見解が不合理である。同時代物でなかつたといふ以外に共通な特徴を持たない諸現象を豫め選分けることなく如何にして學問の問題たらしめるのであらうか。若しくは現在の状態における宇宙のことすべてに關する學問が存在するともいふのか。

固より初期の年代記編者達はかかる疑惱に煩はされることになかつた。彼等は唯一の關係が同時に起つたといふことであつた出来事例へば戦争・條約・英雄や王の死と並んで日蝕・彗星・不思議な流星の出現を物語つた。又傳統主義者が持續のうちににおける變化を扱ふすべての學問に對し歴史といふこの言葉を眞に好意的に守つたといふことも眞實である。然しかかる習慣はそのこと自體が誤つてはゐないのであるから何等危険なことではない。この意味において太陽系を構成する星が常に我々の見る

星でない限り太陽系の歴史が存在し、天文学の領分に包括されてゐる。又地球の構造に最も密接な關係のある火山の噴火の歴史がある。勿論それ等は歴史家の歴史に屬さない。但しそれ等は恐らく對象が若干の點において本來の歴史に特有な研究と合致する限り歴史家にとつても重要性を持つて来る。然らば實際に如何にして仕事の分擔を極めるのか。實例がこのことを多くの説明よりも明白に理解させるであらう。

第十世紀にズエインといふ深い入江がフランドルの海岸に食込んでゐた。間もなくそれが砂で埋つた。如何なる種類の學問においてこの現象の研究を引受けるべきか。誰もが地質學を指定するに違ひない。堆積土の力・潮流の役割・水位における變化がこの點を説明するために考へられたり擧げられたりはしなかつたであらうか。確かに取上げられた。それ等の點に深く注目するとしても、事實はかく簡單ではない。

第一に、推移の原因を詮索しようとするれば、早くも地質學は最も嚴密にはその下に屬さない諸問題をも背負込まなければならぬ。何故なら海岸線の變化は少なくとも堤防の建設・水路の誘導・排水に依つて助長されるからであつた。しかもこれ等の諸事業は集團の必要から計畫され、或る種の社會機構に依つてのみ可能たらしめられるのである。

次に、結果の問題がある。入江の突當りから僅かなところに

都市が建設された。それがブルージュであつた。ブルージュは短かい河に依つてこの入江と繋がつてゐた。ズエインの水に依つてブルージュは輸入したり又ブルージュにおいて作られた商品の壓倒的部分を輸出したりし、今日のロンドンやニュー・ヨークと正しく比肩する程であつた。堆積の進行が日々に顯著になつて行つた。水面が後退するにつれてブルージュはその外港の出口に到ることすら期待薄となり、徐々に衰退して行つた。確かにそのことが到底ブルージュ衰退の唯一の原因とはなり得なかつた。何故なら自然はその働らき掛けが明らかに人間に歸せられる諸要因に依つて準備されることなしに嘗て社會に對し影響したことがなかつたからである。然し少なくとも彼の影響が最も有力なものとして看做さるべきであらう。

又自己の必要から生活してゐる土地を改良した人間集團の努力は勝れて歴史的事實である。貿易の有力な中心の盛衰も同様である。それ故に學問の在り方の甚だ特徴的な點は、一方に、二つの學問の協力が説明のための一切の努力にとつて必要であると判つたいづれにも包攝される部分があつたり、他方に、現象が説明された場合、しかもその結果のみが考察されることになれば、現象のなかには或る程度において決定的に一つの學問から他の學問に研究を委ねるといふ種類のものがあつたりする點にある。歴史の研究を無理にも促がしたのは誰であつたのか。人間がその出現に與つたのである。

事實ミシュレやフュステル・ド・クラランジュが教へたとこ

故マルク・ブロック教授の歴史理論について

ろに依れば、歴史の對象は本來人間であつた。一層適切にいへば、人間達である。單数は抽象に役立つが、關聯性を説明する複数は相互に異なつたものを扱ふ學問にとつて適當である。事物・道具・機械の背後に、又外見は最も冷酷な記述や設立者から全く無縁の如く見える建造物の背後に歴史が知らうとするのは人間達にはかならない。それが出来ない者は精々知識の手足に過ぎないであらう。完全な歴史家は自らを傳説の食人鬼に譬へる。人間の肉を喰ぎ附けたところに歴史家は獲物のあることを知るのである。

人間達に關する學問といふ歴史の特徴から表現の問題に對する歴史の特有な立場が出て来る。歴史は科學であるのか、若しくは藝術であるのか。このことについては第十九世紀初頭に好んで論議された。後れて寧ろ初期實證主義の零團氣に浴してゐた第十九世紀末に方法論者達は歴史の研究において世間が極端と思はれる程の重要性を自分等が「形式」と呼んだものに感じてゐたことを見て憤つた。然し問題の結論は未だに出てゐない。

嚴密な方程式には正確な文章と同様に美がある。尤も如何なる學問においても言葉の美しさを必要とする。然し人間に關する諸事實は、それ等の本質上極めて微妙な現象であり、これ等の多くは數學的規準に依つて表示することが出来ない。固より

表現することの出来ないものを誰かが完全に理解することは出来ないものであるから、完全にそれ等を説明し、完璧にそれ等を領解させるためには言葉の勝れた繊細さと語調における適切な綾とが必要である。自然界の現実の表現と人間精神の現実の表現との間における差違は滑面器を製作する職人の仕事と弦楽器を製作する職人の仕事との間におけるものと同じである。二人の職人はいづれも耗に迄も配慮するが、然し滑面器を製作する職人は精密を期するために機械を使用し、弦楽器を製作する職人は何よりも耳や指の感覚を頼りにするのである。滑面器を製作する職人が弦楽器を製作する職人の経験本位に満足することも弦楽器を製作する職人が滑面器を製作する職人を眞似しようとすることも共に衰むべきことではないであらう。手の業と同じく、言葉の業があるといふことに誰もが納得する筈である。

### 歴史における時間。

歴史は確かに人間達に關する學問であつた。然しこれのみでは餘りに曖昧過ぎはしないか。時間のうちにおける人間達と附言すべきであらう。歴史家は單に人間のみを考へない。歴史家の思想が呼吸する零圍氣は實に持續の時間であつたのである。

如何なる學問も時間を考察外に置くことが出来ない。然し時間と約束に依つて人為的な同一部分に區分する人々の多くに於て時間は全く尺度以上の何ものをも示さないものである。具體的であり生命力のある現實は過ぎれば戻らないものとされてゐるが、逆に歴史における時間は現象を浮かせてゐる液であり、又現象を把握するための場の如きものである。放射性元素が他の元素に變はるために必要な數秒・數年若しくは數世紀が原子論においては基礎的條件である。然しこの變化のそれ若しくはあれが千年前に、昨日又は今日起つた時、それが明日起らうとしてゐる時、これ等の諸事實は地質學者にとつて或ひは重要かも知れないが、物理學者にとつて何等重要なことはない。これに對し如何なる歴史家も、シーザがゴールを征服するために八年を要したこと、エルフルトの正統派の修道者からウィッテンベルグの改革者となるためルターにとつて十五年を必要としたことを知つて満足はしない。ゴールの征服に對しヨーロッパ社會の盛衰における正確な年代記地位を與へることの方が寧ろ歴史家にとつてそれ以上に遙かに重要であつた。又修道士ルターにおける魂の危機が永遠な或るものを含むかも知れないといふことを些かも否定しないとしても歴史家は、この危機に際し英雄であつた人間とこの危機が背景に持つた文明との運命の曲線の上に時點を正確に決定する迄公正な説明をしたとは考へないであらう。

然し現實の時間は本來連續物であり、同時に無限な變化に富

むものである。相對することの二つの特質から歴史研究上の重大な問題が生ずる。即ち歴史といふ學問の存在理由について明確にして置くといふことのほかに、時代の繼續的な流れから切り離した連續する二つの時期を考へた場合、これ等二つの時期のうち古い方を理解することが新しい方を把握する上に必要かどうかといふ問題である。

### 起源の偶像

最も遠いものに依つて最も近いものを説明するといふことが研究の主題を過去に求める人々の間において自つと尊重され、時には盲従を強制する迄して歴史の研究を支配した。歴史家のこの種の偶像が最も特徴的な形においては起源に依つて事物を説明させる強迫觀念と呼ばれた。歴史的思想の發展において起源に依つて事物を説明させようといふ態度が特に喜ばれた時期があつた。

譬てルナンが「人間達に關するすべてのことのなかにおいて起源は何よりも研究に値する」といふた。又彼より前にサン・ブーブが「私は好奇心を以て最初のものを詮索したり取上げた」と書いた。かかる觀念は確かに彼等の時代のものではあ

故マルク・ブロック教授の歴史理論について

る。起源といふ言葉も同様であり、その派生語は數へることが出来ない。然し起源といふ言葉は非常に不明確であるため極めて氣懸りな言葉である。

起源といふ言葉は單に「始め」を意味するの否か。若し「始め」といふ意味ならば、起源といふこの言葉は大體において明白であらう。然し歴史の現實の大部分についてかかる出發點といふこの概念が甚だ曖昧であることを考慮しなければならぬ。これは疑ひもなく定義の問題であり、不幸にして誰もが非常に屢々定義することを忘れてゐた。

起源に依つて誰もが逆に原因を考へるの否か。如何なる場合においても、一層甚だしくは疑ひもなく人間に關する學問において原因の研究に本來纏はる困難以上の困難はないであらう。

然しこの二つの意味の間で一般に非常に明瞭に氣附かれてゐないだけに二層恐しい混同が屢々行なはれるのである。日常の言葉において、起源はすべてを説明することの出来る始めのものである。更に悪いことには、すべてを説明するために十分な始めのものである。ここに曖昧な點があり、ここに危険な點があるのである。

聖書解釋學者の異常な努力において特に顯著な起源に依つて事物を説明させようといふかかる強迫觀念に關聯して最も興味ある研究に着手しなければならぬであらう。「司祭に對しバ

レスが「私は貴下の不安を領解することが出来ない。ヘブライ語の若干の言葉に關する數人の學者の議論は私の心に何を訴へようといふのか。教會の雰囲気十分である」と語つた。代つてモーラスが「無名の四人のユダヤ人の福音書は何を示すのか」といつた。これ等の嘲弄家達は我々に嘘をいつたのである。パスカルもボッシュエも確かにこのやうにはいはなかつた。歴史に何も負ふところのない宗教的經驗に疑ひもなく誰もが承服することが出来る。理論者にとつて神を信ずるためには内的感得を以て十分である。然しキリストの神たることを信ずるには十分ではない。何故ならキリスト教は本來歴史的な宗教であるからであり、最初の教理は實に出來事の上に組立てられたのであつた。使徒信經に「我はボンシヨ・ピラトの管下にて苦しみを受け、三日目に死者のうちより蘇へり給ふたイエズス・キリストを信じ奉る」とある。信仰の始めはここにその基礎があつたのである。

疑ひもなく避け難い波及に依つて宗教を解明するための確實な方法として存在理由を持ち得たかゝる努力が研究の他の諸部門にも及んだ。そこにおいてははれ得るやうに、起源に依つて説明せよといふ態度が歴史の研究においても事物を判断するに際して採られた。例へばテオヌがフランスの起源を詮索した時、同時に彼の企てたことは人間に關する誤つた原理から生じた政治の誤謬を指摘することであつた。然しゲルマン人の侵入若しくはノルマン人のイギリス征服が何を惹き起したとして

も、現在を説明するために過去は現在を一層完全に證明したり決定したりしようといふ意圖程積極的には役立たない。多くの場合におけるやうに、起源の惡魔は單に眞の歴史に逆らふもう一つの極惡な敵―判斷癖―の變身に過ぎなかつたのである。

とにかくキリスト教の研究に戻らう。正しからんと欲して落着かない歴史家にとつて必要なことは教會において毎日のやうに説かれてゐるカトリック教に對する態度を決定するに足る史實を見出すことであり、又考察の對象として現在のカトリック教を説明することでもあつた。現實の宗教現象を正當に把握するためにその始めを理解することは明らかに不可缺ではあるが、説明する上に十分ではない。全く變らない信仰といふこの言葉の下において信仰がその内容を事實全く變へてゐないならば、信仰の維持された理由こそ寧ろ考へて見なければならぬ。要するに問題はイエズスが苦しみを受けたかどうか、蘇へつたかどうかを知るのではなく、何故我々の周囲の多くの人々が苦難と復活とを信ずるやうになつたかといふことである。樹は樹果から生える。然し樹果は生長を妨げない恵まれた條件に遭遇した場合においてのみ樹となり又樹であるといふことを忘れてはならない。

宗教史がここにおいては例として引用されたに過ぎなかつた。學問において取上げられる人間の或る種の活動についても關係を説明と混同するといふ誤謬が起源に依る研究者を待伏せてゐる。

實際の意味に對して往時の語原學者達が最も古くから知られてゐた意味を附けた時、机は本來覆ひを、又切手は太鼓を示したといふことを證明した時、全部をいつたと考へることは結局において彼等の錯覺である。重大な問題は意味の轉化が如何にして又何故起るかといふことを知ることにあらう。如何なる言葉も、言葉それ自體の過去と同じく、如何なる國語においても語彙の現在の状態に依つて決定された役割を保ち得ない。その代り時代の社會的狀態に依つて規制されるのである。机は政府の机といふ工合に使用された場合官廳といふ意味である。郵便局の窓口を通じて切手を購入した時、郵便事務の徐々に完成した組織のほかに、謄謨糊の附いた模倣紙の貼附が嘗て捺印に代つて思想の交流を旺盛ならしめた決定的な技術上の變化こそ太鼓といふこの言葉を切手といふ意味に使つた用法が出て來るために必要であつた。封筒の表面に貼り付けようといふ切手と、例へば樂器商が自分の樂器の正しさを自慢した太鼓との間に如何なる混亂も起る危険がないやうな相互に掛け離れた方向に舊い言葉の異なつた意味が今日あるため、習慣に依つて區別することが僅かに可能となるのである。

「封建制度の起源」について人々は云々した。どこに封建制

故マルク・ブロンク教授の歴史理論について

度の起源を求めめるのか。或る人々は「ローマに」と答へ、他の人々は「ゲルマンに」と答へたが、空しい夢であることは論を俟たない。事實ローマにもゲルマンにも謂ゆる封建時代に相當する後の時期にヨーロッパに持續してゐる若干の慣習例へば主從關係・從軍の義務・勤務に對する報酬としての土地の役割等が存在した。固より多くの點において變つてゐないのではない。又ローマ人に依つてもゲルマン人に依つても封建時代を通じて使用された若干の言葉例へばラテン語の保護・ドイッ語の領地等があるが、これ等の言葉に對しては徐々にしかも全く氣附かれずに殆んど新しい内容が興へられた。即ち歴史家の大きな失望として人間達は體裁の變る度に用語を變へる習慣を持たないのである。然しとにかくヨーロッパ封建制はその特異な成立事情から見て舊組織の殘存ではなく、過去の或る時期に社會環境の全體から誕生したのであつた。

嘗てセーニョボーが「私は第十八世紀の革命思想が第十七世紀のイギリスの思想に由來することを信ずる」といつた。これに依つて前世紀のイギリスの諸著作を讀んだり若しくは直接その影響を受けたりしたため啓蒙期のフランスの著述家がイギリスの政治の諸原則を採用したことを意味しようとするのか。誰もが彼の言を正當と認めるが、但しイギリスの諸方式に對してフランスの哲學者が自分等に固有な知識の内容や感情の表現を加へてゐないと考へられる限りに於いてであつた。然し若しこのやうに借りものといふことにするとしても、思想傳播の歴史

は完全に解明されはしないであらう。何故なら問題は常に何故交流が早くもなく遅くもない前述の時代に起つたかを知ることにあつたからである。傳播は二つのことを前提として起る。即ち種と繁殖時に必要は土地とである。

然し結局において歴史現象は時代の研究を除いて明確に理解することが出来ない。實に歴史現象は悉く發展の諸段階のうちであり、他の段階と同じく我々が生活してゐる段階も亦發展の諸段階の一つにはかならない。アラビアの諺に「人間とはその父よりも自らの時代に似るものである」といふのがある。東方のこの機智を忘れたため過去の研究は往々不評判に終つたことがあつた。

### 現在と過去との境界

現在の全部を説明することが出来ないために過去は現在の説明にとつて無用であると信じなければならぬのであらうか。奇妙なことはこの問題が今日取上げて差支えないといふことである。

我々から非常に近い時代迄實はこの問題が既に大體のところ解決してゐたかの如く見えた。例へば先世紀にミシュレが眼前にある刮目すべき事柄のみを對象とした「民族」と題する著作の冒頭において「現在にだけ、現實にだけ止まらうと欲する人

として出て来る硬貨制や金本位は今日の經濟學者にとつても依然として現實的なものであり、微嗅い過去のものとして斥けられてはならないであらう。

時間の無限な経過のうちから狭い範圍の時代を別にすることが出来る。かかる時代は、その出發點において我々から比較的近い距離にあれば、その歸著點において我々の生活する時代と重なつてゐて、何事も即ち社會や政治の状態の最も顯著な特徴も物質的手段も文明の一般的傾向も我々が毎日を送る世界と深い相違を示さないのであり、結局のところ我々にとつて「同じ時間の繋がり」であるかの如く見え、過去の他の時期と決して同一視されてはならない。嘗て「一八三〇年以降は歴史ではない。それは政治である」といはれた。「一八三〇年以降は政治である」と今日においては誰もいはない。丁寧な表現をすれば、寧ろ社會學である。若しくは深く考へなければ、新聞の記事である。然し多くの人々が一九一四年以降一九四〇年迄は歴史ではないと進んで繰返すであらう。このやうに排除する理由については固より餘り明瞭には判つてゐない。

然し我々から最も近い事實はすべての研究にとつて共通の敵であるから完全に除外されると考へる人々は、純潔な歴史の女神クリオを現實との非常に激しい接觸から一途に守らうとするのである。このやうに考へることは實に我々が自己の感情を統

放マルク・ブロック教授の歴史理論について

々は現實を理解しないであらう」と書いてゐるし、又既にライプニッツは彼が歴史に期待した諸利益のなかに「現在の事物の起源は過去の事物のうちに見出される」といふことを加へ、その理由として「現實は過去に依る以外決して完全に理解されない」ことを挙げた程であつた。

然しライプニッツやミシュレ以後、大きな變化が起つてゐる。即ち技術上の相繼ぐ革命は時代間の心理的間隔を過度に擴大したため、恐らく電氣や飛行機の時代の人間が彼の祖先を非常に遠くに感ずるであらうといふことは何等の理由もないことではなくなつたのであつた。祖先に依つて決定されることはなくなつたと安直にしかも輕卒に現代人は結論してゐるし、又技術家全部の考へ方において本來的なものと思はれる過去を無視するといふこの態度に現代人の誰もが味方するやうになり、發電機を始動したり修理したりするために直流電氣に關するボルトの舊い概念を研究することが必要でないかと考へるやうに、機械に依つて影響される多くの人々にとつて自づと免がれないこととして、誰もが現在の人間達に關する重大な諸問題を理解したりそれ等を解決しようと試みたりする上に以前のことを分析することが何の役にも立たないと信ずるのであつた。歴史家も過去のことを完全に説明しようと思はず、現代人のこの態度に組するため、如何にして自己の領域においても技術家の場合と同じく遠い過去のこととは切捨てて差支えないといふ觀念に裏はれないことがあるのであらうか。舊い經濟書の全部に現實の制度

制することが出来ないかと考へることに類するのであり、又特に思想的影響のある時、現在と過去との境界が時間の隔りといふ數學的尺度に依つては決定されないといふことを忘れてゐるのも同然であつて、現在を毛嫌ひする人々は勢ひ過去をも毛嫌ひする結果となるであらう。

他の人々は逆に人間の現在を學問的に完全に究明しなければならぬと主張した。尤もこれは對象として過去を持つ學問と全く異なつた學問に従事する人々の場合であつて、彼等は單に過去の數十年間を觀察することに依つて今日の經濟を分析し、理解しようとする。要するに彼等にとつて自分等の生活してゐる時代はこれに先行する時代と全く別個のものであり、前者は後者に依つて説明することの出来ない程に對立的なものであつたのである。従つて彼等は非常に遠い時代の歴史を精神の有害な贅澤品と感じ、好古家の一團を死人の着物を脱がせる人々と非難するのであつた。

### 過去に依る現在の理解

現在に依つて現在を理解することが出来るといふ現在に對し認められたこの特權は、詳細に觀察するならば、一聯の奇妙な根據に基礎を置くものである。

人間の地位は二・三代の間に非常に急速であるばかりでなく、

同時に全面的な變化を遂げた。非常に舊い制度と同じく、傳統的なものを保つて来た如何なる習慣も墟床や工場における同じ變革を免かれなかつた。現在に依つて現在を理解することが出来るといふ現在に對し認められたかかる特權は、社會の多くの創造物にとつて固有な内部的な力を忘れたものである。

人間は終始人間を多少とも自發的な囚人たらしめた機械を製造する時代に到達した。ノール縣の農村を旅行した如何なる視察者も農地の奇妙な形に依つて驚かさなかつたか。所有地の變遷が時代の経過を通じて本來の姿として現はれた細分の状態にも拘はらず、過度に細く長い驚くべき多くの小部分に細分された革紐狀の耕地の光景は未だに今日においても農學者の間で若干の論争を残してゐる。このやうな配分が必要とする勞力の浪費、又そのやうな配分が農民に負はせる不便は全く論議の餘地もない。かかる配分を如何に説明すべきか。非常に苦しんだ公法學者達は市民法典とその必然的な結果を以て答へ、相續法を改正すれば、禍根は悉く排除されるであらうと結論した。

若し彼等が完全に歴史を知り、經驗主義の時代を通じて訓練された農民の精神状態を嚴密に調べるならば、彼等は極めて容易に解答を見出し得たであらう。事實においてこの體制は今迄にも學者が満足な説明を下すことの出来ない程遠い昔に溯るのであり、ナポレオン時代の法律家といふよりは寧ろドルメン時代

の開墾者に由来したのであつた。それ故原因に對する誤解は直ちに説明の失敗を招き、過去を無視することは現在の理解にとつて害になるばかりでなく、現實において現在の理解を危ふくするのである。

但し如何なる社會も直接これに先行する時期に依つて完全に決定されるためには、變化に對して容易に順應する構造を持つておなければならぬばかりではない。更には時代間の推移が前後に密接して起り、子は父を介して祖父と繋がるといふ状態にあることが必要である。

例へばフランスの農村を考へよう。勞働條件がそこにおいては晝間子を父母に近寄せないため、主として子は祖父母に依つて養育される。従つて新しい精神が形成される場合においては常に先代が模範となり、變化の有力な擔ひ手であつた先代を越えて最も柔かい頭腦が最も固い頭腦と結ばれるから、特に農村において傳統主義が特徴的なものとなるのであらう。然しこれは特別の例外であつて、多くの子達は祖父母の教訓に負ふと同じく父母の教育にも相當なものを依存するのである。

疑ひもなく書物が非常に距つた時代間における思想の傳播を容易にした。過去の人々例へばルター、カルヴィン・ロヨラのやうな人達を若し歴史家が理解しようとし、又人にも理解させようと思ふならば、これ等の人々を彼等の時代の精神的零團氣に

影響したり、一層正確には我々の問題ではなかつた意識の問題を決定したりした當時の時代環境のなかに依つて把えることが歴史家にとつて第一の義務であらう。現實の世界を正當に把握するために、我々から時間的に數百年も昔の宗教改革に對する理解が、時間的には確かに近いが然し大したことない思想や感情の多くの他の動向に關する知識程に重大ではないのであらうか。

誤謬は全體として明白である。固より人類進歩の過程は短かく且つ深い激動の連續ではなく、寧ろ無限の連續において大きな激動が最も遠い時點に迄も影響を及ぼしてゐるのである。距離を測定することに依つて地球に對する月の影響が太陽の影響より遙かに著しいと考へることが果して許されるものか。空中におけるやうに時間においても、影響の効果は單に隔りのみに依つては決定されないのである。

しかも過去の事物のうち、現在に對し何等の影響も及ぼさないものが、現在の理解にとつて無用であるとは限らない。寧ろ確實な比較に依つて現在に對する眞の理解が得られるのである。

今日においては既に時間のなかに「變らない或るもの」があり、それが人間であるとは誰もいはない。確かに人間は多くの變化を遂げ、精神的にも肉體的にも大きく變貌したが、然し本性において少しも變つてゐないといふことは事實である。従つて現在において把えることは人間の眞の理解にとつて不十分で

あり、過去と比較することに依つてのみ一時的には影を潜めることもあるが然し如何なる場合においても盛上がることの出来る逞しい實力、無意識的に持つてゐる驚くべき氣力を人間に依つて容易に察知することが出来るのである。

(未完)